１９８０年5月7日　第三種郵便物認可　２０１４年1月１５日発行　ＫＡＳ１４３９号

発行　神奈川県自閉症児・者親の会連合会　代表者　内田照雄　厚木市愛甲2-11-6-109
毎月１回１５日発行

KAS マンスリーやまた

自閉症者の地域生活を援助する
社会福祉法人　横浜やまびこの里
〒224-0024　横浜市都筑区東山田町２７０番地

ＥＦ６４機関車団体ブルートレイン牽引機
横浜駅にて　２０１３年１０月１２日撮影

【２０１４年１月号】

▼ＦＭやまびこ　藤村　昌之　２
△里からのたより　小林　信篤　８
▼ＦＭやまびこ番外編その１　小林　邦子　１０
△ノートンの映画大好き　ノートン　１４
▼ＦＭやまびこ番外編その２　木村　重之　１６
△自閉症児の親も一日にしてならず　ｍｏｍｏｅ　２０
▼本棚から　西尾　紀子　２３

◆コラム　（岸　里美）　・・・７
◇よこはま三歩　（傳　ひかる）　・・・１９
◇疑問符だらけの現場用語集　・・・１５
◆後援会・編集後記　・・・２４

横浜日吉就労支援センターのご紹介

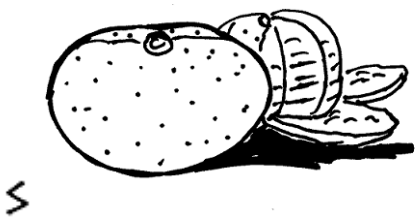
横浜日吉就労支援センター　藤村昌之

前回発行のマンスリーやまたでも紹介しましたが、横浜日吉就労支援センターが開所しました。

横浜市内には横浜日吉就労支援センター（以下、当センターという。）を含めて９か所の就労支援センターがあります。横浜市内在住者で障害のある方々の就労をサポートする役割があり、運営費は全額横浜市が負担しています。横浜やまびこの里が開所以来支援してきた自閉症者や発達障害者のみならず、知的障害者、精神障害者、身体障害者等の障害のある全ての方々がサポートの対象となります。通所や入所の施設と異なり、定員〇名という枠組はありません。相談を希望する全ての方々への対応が求められます。相談にお見えになる方は、障害のある本人は勿論ですが、就労移行支援事業所（例えば現ワークアシスト）や就労継続支援Ｂ型事業所（昨年度までのワークアシストやまびこ）の職員と一緒に来所されることもあります。

1.当センターに繋がった経緯

６月中旬にＡさん本人（女性/21 才）から当センターに電話が入りました。対応した職員が、手帳の種類、現在の所属機関の名称、そこで何を行っているか等をまずは聞き取りました。この聞き取りを通じて、本人の障害を含む自己理解の状況など、本人の状況把握に努めます。必要に応じて本人の了解を得た上でご家族や所属先の担当者、区役所の担当ケースワーカーへの状況確認や面接の際に同席等をお願いすることもあります。



Ａさんからの最初の電話で、B2 の手帳を所持していること、就労継続支援 B 型事業所を利用していることなどがわかりました。そこで、本人の了解を得て、まずは現在の所属先の担当者に連絡を取り、Ａさんの状況を確認したところ、市内の他の就労支援センターに登録している可能性が判明したので、利用登録の重複は出来ないこと、登録の変更を希望する際には、現在の登録を一旦解除する必要があることをお伝えしました。その結果、Ａさんは自ら解除の手続きを取り当センターに登録し直しました。

２.当センターでの面談

８月初旬、Ａさんと区の担当ケースワーカーに当センターに来所していただき、今までの経緯等を詳しく聴取しました。特に「就労したい」という本人の希望の有無や現在の所属先で提供されている訓練の内容、指導者や周辺の同僚と関わる際の課題の有無、グループホームに入居しているので生活の状況等、就労に向けた課題を分かる範囲で確認しました。

次回の面談は、Ａさん本人の作業活動中の様子の確認のため、当センター職員が現在の所属先に出向くことの了解をいただいて面談を終了しました。

３.作業場面の見学

Ａさんが現在所属する事業所は、精神障害のある人たちを主たる対象として運営しています。また複数のグループホームも運営しており、Ａさんもそのグループホームの１つに２年程前から入居していました。

訪問当日の作業は、和菓子を入れる箱の箱折でした。総勢 12～3 名の利用者が 3 班に分かれ分業体制（作業の難易度別）を取っていて、Ａさんは最終の難しい工程を 2 人で受け持っていました。この日は初めて取り扱う箱の箱折作業で、開始時に口頭で 1 度指示されただけで作業に入っていました。開始直後はやや首をかしげるようなしぐさを見せながらの作業でしたが、途中で指導者に 1 度確認した後は精度やスピードに問題無く、最初の 50 分間周囲の人と話をすることもなく作業を集中しておこなっていました。

タイムカードを見たところ、出勤時の遅刻が複数回あることが判明しました。この対処については後程触れます。

見学後、関係者で集まり、今後の方向性について打合せを行いました。

その中で、この事業所が受託している清掃業務を、Ａさんが月３回担当していること、そしてＡさんはその清掃業務がとても好きで遣り甲斐を持っていること、その時は遅刻が全く無い事等が新たに分かりました。

４.本人はどんな仕事に就きたいのか？

訪問時の面談で、本人が「自分の特性として、手順が決まった業務はしっかり出来る」「(特に清掃は)綺麗になったことが目で見て分かる」ので、是非やってみたい仕事の一つであることをはっきりと話してくれました。他にも定型反復的な業務も得意であること、人が数多くいる環境では少々緊張してしまうこと等、本人が話してくれました。

５.A さんが希望する清掃業務に関する募集情報が入る

９ 月に入り高齢者介護の入居施設を運営している企業から当センターに電話が入りました。この企業は 10 年程前から県内 10 数か所の高齢者介護施設を運営していて、この施設内の清掃業務を障害者を含むチームで行っています。業務体制は責任者の下に２チームを配し、指導者１名と障害者３名が一つのチームで各施設に出向く形態です。業務指示は全て指導者に一本化されており、障害者にとっては業務遂行上配慮された環境下で、A さんの希望とマッチする可能性があることが推察されました。

６.Aさんの外部実習先場面を見学する

そこで、企業ニーズとＡさんの作業スキルや実施状況がマッチするかの可能性を探るため、A さんが現在行っている生活支援センターでの清掃業務の状況の見学を企業担当者と同行して行いました。

見学先は、最寄駅から徒歩１分程度の場所で、業務開始時間（9 時 30 分）の概ね 15 分前には集合して朝礼を行い、その日の清掃業務の分担や範囲、注意事項などの指示を受けた後で各々の持ち場で業務を開始しました。

Ａさんが担当する場所はかなり広い面積がありましたが、2～3m 四方を一区切りにするイメージを掴んで清掃することが出来ていました。途中 15 分の休憩がありますが、午前中約２時間 30 分間を立作業で業務を続けて行えることも確認出来ました。企業担当者からは、次の段階である企業内実習を行うという判断がありました。

７.高齢者入居施設の見学を行う

次にＡさんに情報提供するに際し、就職先の職場環境の確認は重要であり、必須ですので、先ず当センターの支援者が施設見学を行いました。Ａさんが担当することが想定されるのは、床、トイレ、玄関ドア、場合によっては外構等の清掃でした。職員の事前の見学終了後、Ａさんの見学日程を調整し、実施し、実際の業務や働く環境を直接Ａさんが確認することが出来ました。

見学の振り返りで、改めてＡさんに、この職場で仕事をしたい希望の有無について尋ねると、「是非やってみたい」という返事があり、本人の意思を確認できたので、企業内実習の段取りに入りました。

８.実習

職場実習は 10 月下旬に２週間（延 10 日）行いました。曜日で担当施設は異なりましたが、4 施設で実習を行いました。このチームの指導者は先ほども書きましたが、施設での支援経験が豊富な職員です。

実習では的確に作業が行えており、動きにも余あまり無駄が無く、指示された業務をしっかり遂行していました。実習実施の段階では課題は浮び上ってきませんでした。Ａさんは市内の特別支援学校に入学し、学校内でのキャリア教育の成果が感じ取れました。

社員は 10 時から朝礼に臨みます。ここで３つの事業部方針を全員で唱和します。Ａさんも「私も唱和したいので、メモをみても良いですか？」とたずね、実際に後ろから一番大きな声で唱和し、他の社員がつられて大きな声を出すようになったということを後日、最終面接で伝えられた事業部長は驚くと共に大変感心して下さいました。

９. 実習を終えて採否の連絡まで

２ 週間の実習を無事終了し、あとは会社の返事を待つ段階となりました。今迄の経緯から不採用ということはまず無いと思っていましたが、やはり最終の返事を聞かないと安心出来ません。

実習終了から１週間後に会社から「採用したい」という返事があり、早速、Ａさんの所属事業所を通じて本人の意向を確認したところ、「有難うございます。お世話になりたいです」という返事があり、会社にその旨を連絡しました。

また、所属事業所には今後グループホームとの連携が必要と想定されることから、担当者との調整の機会の設定を依頼しました。

10. 生活場面での課題とその対応

前述のようにＡさんには遅刻する傾向が若干あり、これは就労に向けての課題の１つになると思われました。この課題への対応如何で、就労が長く継続されるか否かの分かれ道になることが想定されました。

現在Ａさんが入居しているグループホームは主に精神障害者を対象にしており、Ａさんにとって落ち着ける環境になっていますが、今までは多少の寝坊をしても特に起こすことをしていなかった事も分かりました。就職するにあたり遅刻は厳禁です。特にこの会社の業務スタイルはチームで一緒に移動するので、一人の遅刻は他のクルーにも迷惑がかかります。対策として、平日の起床は６時を基本としました。グループホームを出発する時刻を８時 20 分とし、それまでに自分で朝食を準備したり、出かける準備をすることとしました。そのため「6 時 30 分までにＡさんが起きてこなかった場合には職員が声をかけて確認する」という対応をしてもらうこととし、採用内定後、グループホームを見学した際に、当センターから改めてお願いしました。

11.入社までの手続き

採用内定後、入社日までに下記の対応をする必要があり、短期間での対応が求められました。

・会社が指名求人を所轄のハローワークに提出し、Ａさんが登録ハローワークに受け取りにいく
・健康診断の受診
・会社提出用書式の記載

これらの手続きを、グループホームの担当者の協力を得ながら進めました。

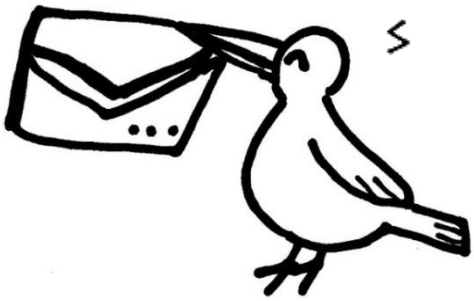
12.入社後の状況

12 月中旬の初出社日に合わせて、当センターの職員が事業所を訪問しました。Ａさんが実習時と大きく変わっていたことは、制服を着ることです。これで皆と同じ装いとなり、違和感なく初日の朝礼を迎えていました。Ａさんは実習中と同じく大きな声で事業部方針を唱和していました。Ａさんのグループホームでの生活は、就労後も特に大きな変化はありません。今後は仕事をして給料を得ることとなり、経済的な自立度も高まり、休日の余暇活動が充実することが期待できます。その上でグループホームの担当者に、Ａさんは今まで得た事の無い金額を手に入れるので、金銭管理に関する支援をお願いしました。

13.まとめ

Ａさんから電話を貰ってから約半年間という短い期間で本人と会社の希望が上手くかみ合って就労が出来ました。今後も順風満帆な状況が続く保障はありません。しかし、会社の障害者雇用の体制がきちんとした仕組みの下に運営されていること、当センターと会社、ケースワーカー等、Ａ さんを周囲で支援する関係者と良好な関係を維持していくことで、今後も、予期せぬ出来事が起きた際にも速やかな対応がとれると思われます。

Ａさんがこの会社でこの先 5 年、10 年と永く仕事が続けられることを心より願っています。このことは、Ａさんにとっても、会社にとっても素晴らしいことですから。



～コラム～

はじめまして。今年度からリンクで働いております、岸　里美と申します。

社会人一年目、毎日があっという間に過ぎ、気が付けば冷たい風が身に染みる季節になってしまいました。

今回は、私の生まれ育った三浦半島について、冬の魅力を紹介したいと思います。

三浦半島といえば、相模湾・東京湾に挟まれた半島で、なんといっても海が魅力です。観光客で賑わう夏とは違い静まり返っていますが、冬の海は水が澄んでいてとても綺麗で、夏とは違った一面を見せてくれます。晴れた冬の日にはキラキラとした水面を眺めながら、ゆっくりと浜辺の散歩を楽しめます。

海以外にも、多くの自然に恵まれています。三浦の名産である大根とキャベツは冬から春にかけて収穫期を迎えるので、寒い時期も一面に緑がいっぱい、のどかな風景が広がっています。ちなみに私の実家も農家なので、冬は毎日のように大根とキャベツを使った料理が食卓に並びます。定番ですが、この季節はおでんとして食べるのが一番おいしいです。（キャベツも入れるとおいしいですよ）

横浜からもアクセスしやすい地域ですので、皆さんもぜひ、冬の三浦半島へ遊びにきてみてください。

里からのたより

横浜市発達障害者支援センター　小林信篤

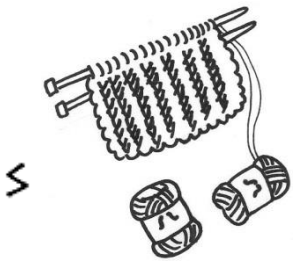
また、また、起こってはいけない痛ましい事件が、千葉で起きてしまいました。

同じ福祉の仕事をしていて、どうしてこのようなことが起きてしまうのか、本当に心が痛いです。事件は 11 月下旬に起きました。知的障害のある 19 歳の少年が県立の入所施設で、職員に暴行を受け、それがもとで亡くなったということのようです。しかも複数の職員が繰り返し暴行をしており、被害者は亡くなった彼一人だけではなく、分っているだけでも他に 9 名が被害にあっていたということのようです。

暴行した職員は同法人の内部調査に対し「利用者の興奮を抑えることができなかった。」「(他の利用者をたたくなど) 他害行為を抑えるためにやった。」などと説明し、加えて、県の調査では「支援がうまくいかず、手を出してしまった。安易な方法に頼ってしまった。」と話しているそうですが、ちょっと待っていただきたい。暴行を加えることは「支援方法」ではありません。支援の根本が解っていないから「安易な方法」などという言葉で表現して、自身の行動を正当化しているように思います。

と、批判することは容易いのですが、ひるがえって自分たちの実践はどうだろうかと見直してみます。

当法人では、例年上半期の事業および予算の報告理事会の前後に「苦情解決事案に関する報告会」を各事業所の苦情解決事業における第三者委員を招きして報告会を行っています。今年は 12 月 10 日でした。今回の報告では、事故の報告はあったものの、苦情解決に至った報告はありませんでした。参加した委員からも苦情解決に至る事案がなかったこと、事故についても少ない件数であることについては、お褒めの言葉を受けました。ただし、「だからこそ、ヒヤリ・ハットの報告がもっとあっても不思議ではない。」という指摘も合わせていただきました。



常々、ヒヤリ・ハットについては、その概念が不明確だから把握しにくいという思いがあった私でしたが、改めて、先の事件報道などを耳にし、そういう視点でとらえるのではなく、この取り組みが誰のために行われているのか、何を目指そうとして行われているのかを改めて考えさせられることで、内容以上に支援者一人一人の支援に取り組む姿勢が問われているのだなと感じました。

先の事件では、所管する自治体は「職員の未熟な支援スキルや虐待防止の基礎的な理解の欠如」があったとコメントしています。その通りですが、そこで暮らさなければならない入所者も、その預けざるを得ない状況にあるご家族も心配はぬぐえないことでしょう。

「虐待０」は支援目標ではありません。私たちの果たすべき義務であるということを心にとめて、これからの支援を展開していきたいと考えています。

FM やまびこ　番外編　その１

振り返る道向かう道⑦　発作そして父の死

小林　邦子

最重度自閉症の息子俊文は 47 歳になった。世間の理解は得られなかった幼児期少年期。東やまたレジデンス入所という大きな幸運をいただいて 16 年。ようやく適切な支援指導をいただくようになり、現在は穏やかな日々を過ごしている。母親の私は高齢者の域に入って改めて振り返る過ぎゆきである。

学園では雑種の小型犬チビを番犬として放し飼いにしていた。子犬の時に拾われてきたそうだがとても利口で、園生には絶対に吠えないが俊文にだけは吠えるという。保護者には初めて会うと軽く吠え、２ 度目は記憶していて吠えない。俊文はなぜ嫌われているのだろう。寮の繕い物の手伝いの日、休み時間の園庭を眺めていると、園生が引く小さな木車にチビが乗せられて、庭をまわっている光景があった。そこにどこからともなく現れた俊文がうしろから近づき、チビの頭をぽんと叩いて逃げていった。俊文の後ろ姿をじっと見つめているチビに「おとな」を感じた。園生のなかで俊文だけが吠えられるという理由に納得の一場面であった。

私は若い頃より短歌を作り、子育ての頃はゆとりがなかったが、俊文をひばりに入所させていただいてから新たに歌を作り始めた。施設に入所させた親としてのつらさ、寂しさを詠んだのだが、歌の師に歌集にすることを勧められ一冊にまとめた。歌の仲間たちが出版記念会を開く準備をして下さったが、子を施設に預けてこんな晴れがましいことをしていいのかと自分を責める思いがあり、お世話になっている方々には秘密にした。記念会開催を応援してくれた夫から、俊文を詠んだ歌集なのだから、せめて 1 人か 2 人の方に来ていただきなさいと言われ、小児療育センターの松阪先生と、養護学校の近角先生に案内状をお送りすると、お二人が出席してくださった。会場は中野サンプラザで、歌人や友人が 90 名参加の出版記念会となった。歌集を読み涙がとまらなかった、自分は子供を持たなくて良かったなどという有名歌人の方たちのスピーチが続いたが、近角先生は敢然と反論のスピーチをくださった。作者は自閉症の子をもったことが悲しいと詠んでいるのではなく、子のおかれた環境を悲しいと詠んでいる。これからは俊文を謳歌する歌も期待するという内容だったが、会場は静まりかえった後、おおきな拍手喝采が起き、最高のスピーチだと友人たちが言った。松阪先生も機関紙「かざぐるま」に記事を書いてくださって、大きな喜びをいただいた会となった。

俊文が学園に入所後も、小児療育センターには母親のみが、年 3 回の相談グループに参加していた。年 1 回の佐々木正美先生の医療相談も受けることができる。先生に学園での多量の向精神薬のことをお話すると、「これは異常ですね」とおっしゃって、Ｙ医師の病院をお聞きになった。佐々木先生が大学病院にお話してくだされば、よい結果になるかもしれない。しかしＹ医師が納得しなかった場合、再び私は叱られ俊文は退園させられるかもしれない。私立の施設を断られた経緯もあり、保護者は無力である。このままそっとしておいて下さいと佐々木先生にすがるようにお願いしてしまった。

昭和 57 年ひばりが丘学園が建て替えられることになり、園生の大半は県内の施設に分散して移動した。ひばりに残ることになった少数の園生は 10 日間を家庭で過ごすことになった。解体に向けての用具整理のため、職員が総出で作業をされるという。休日なら兄の助けを得られるが、母親一人で俊文を連日みることは難しいと寮長のM保育士に相談した。M寮長は俊文を入園時から親身に世話をしてくださっていたが、転勤で離れた後、再び俊文の寮の担当となっておられた。園では職員が作業をするということで、俊文を手伝い役として面倒をみてくださるという。連日お弁当を持って俊文とひばりに出かけた。5 年半を過ごした寮の家具のかたづけや、不要品の焼却など男性職員は大忙し。私はその間、M寮長と一緒に衣類の繕いなどをしながら、窓から俊文の働きぶりを見るのだが、俊文は声もあげずに手伝いをしている姿に感動した。焚き火を囲んでいる様子は、どこに俊文が交じっているのか分からないほどである。俊文に手がかかったろうが環境がととのえば、こんなに穏やかに働けることを知った日々だった。

ひばりに残った少数が園の重度棟に生活を始めたが、俊文にとってこれが大きな混乱となった。棟は鍵のある扉を３箇所通る閉鎖的な建物で、辛抱しかないのだが俊文には適応できないようだ。このような棟をなくすための新建築なのだ。重度棟の園生の親の今までの悲しみを思い、つらいのは自分だけではなかったと改めて知った。

再び投薬が増えて、リントン３㎎３錠、ベンザリン５㎎３錠、テグレトール 200 ㎎２錠、アーテン２㎎２錠の１回 10 錠が１日３回、計 30 錠になった。

環境の変化や投薬の関係は不明だが、俊文がてんかんの大発作を起こしたと連絡があった。そのため抗てんかん薬が加わり、薬は飛躍的に増えていった。発作は一旦収まっていたが、学園の新築が成った昭和 62 年、21 歳の時にかなり頻繁に起きることが半年間続いた。帰宅した日に大発作を起こしたことがある。このとき夫も家に居て、俊文が可哀想だと涙を流した。帰宅中も何回か発作が起きたが 21 歳以降は起きていない。

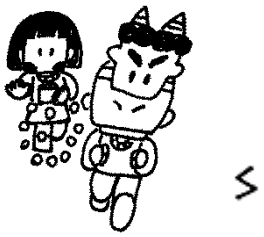
昭和 63 年暮れ、夫が長期滞在出張から体調を崩して帰宅した。病院で検査を受けると、医師より余命は僅かと宣告された。肺繊維症という病は治癒の手立ては全くないという。思いもかけない事態に茫然として看取るのだが、日毎に重態となり絶望の淵に追い込まれた。俊文は父に会った方がよいのだろうか。学園に相談するとM寮長が病院に連れてきてくださった。衰えた父の顔を見て悲しそうに俊文は涙をこぼした。母や兄には寄らず、寮長にしっかりとつかまって病室を出ていった俊文が哀れだった。夫は１ヶ月半の入院で世を去った。平成の世となってすぐの 54 歳だった。葬儀には学園の職員の方々が、俊文の付き添いで来てくださった。柩に蓋を閉められると、手の内側を思いきり噛みながら感情の昂ぶりを抑えているようであった。俊文の姿にも母として涙がとまらなかった。

思いがけない夫の死に遭い悲嘆にくれたが、嘆いてばかりはいられない。まず困るのは住居である。夫は長男のため、結婚後３年ほどで親と同居する約束だった。しかし俊文の大変さから家が一軒建つほどの家賃を払い続けて借家住まいの年月だった。借家は１棟２軒の造りだが、俊文が大きな物音をたてるので隣家に迷惑となる。隣りが転居したのを機に、仕切りの壁を抜いて２軒分を借りてきていた。もう２軒分の家賃を払ってゆけない。１ 軒分を返しても俊文には理解できないだろう。俊文は壁を叩く大きな音を出すので、公営の集合住宅にはとても住めないと思案のすえに夫の母に相談した。夫の実家では、夫の父が７年前に世を去り、母が 77 歳で一人暮らしをしていた。3 年前に「いずれあなたたちが入る家だから」と家を改築し、その費用を出した。義母の老後をみる覚悟で同居させてもらうしかないと義母に相談をした。夫には妹がいる。義母は、老後の面倒は娘にみてもらうので、あなたには絶対に面倒をかけないからと同居を断られた。考えれば当然である。一人息子である夫が 50 代で死ぬなどというのは、妻である私の不注意と思っているだろう。まして俊文が週末帰宅では、老いた義母にはたいへんである。今では義母の決断を有難く思っている。

夫の母に同居を断られたことを私の実家の母に話した。それなら私の老後をみてと言って、母は貸駐車場にしている小さな土地をくれた。私は横浜鶴見で育ち 20 歳の時に家族で旭区に転居した。当時は土地が安かったので父が借家などを建てていた。日当たりは良いがこんな狭い場所に家など建つのだろうかと思ったが、母の知り合いの棟梁が、２ＤＫで車を停めるスペースもある使いやすい２階家を建ててくださった。俊文が大声をあげるため防音ガラスを使い、床は俊文が踏み抜かないように、頑丈な土台にしてもらった。これで何とか俊文の週末帰宅も続けられる。建築費は夫の退職金からで、夫が命と引き換えに遺してくれた家であることを心に刻みつけた。

８ 月末に新しい家が建ち転居した。近隣には自閉症のたいへんな息子がいることを告げて挨拶をし、２週間後に初めて俊文を帰宅させた。「ここは俊君の新しい家よ」と教えた。ためらった末にようやく家に入ったが靴を履いたままである。ようやく脱がせ、俊文愛用のブロックやミニカー、カラー百科など出して、ここが自宅であることをさとらせようとした。しかし私の手を引き出かけることを訴える。住み慣れた家を確かめたいのだろう。車で７分ほどの元の家に連れて行った。俊文がさんざんに傷めているので、家主さんは全部壊して新しい借家を建てるそうで、そのままになっている。ガラス戸の鍵も雨戸も俊文が壊しているので、外から入ることができた。俊文は誕生から 23 年間の家であった。家具も全く無い、がらんどうとなった家の隅々まで俊文は見てまわったが、突然力が抜けたようにへたへたと坐り込んだ。しばらくすると立ち上がり、ようやくあきらめたように車に乗った。新しい家に戻ると今度は靴を脱いだが、ひと声も発せずに食事をして、好きなタオルケットを出してやると、あきらめたように眠った。

俊文は 22 歳で父を失った。私はパート勤めを始めたが、隔週の週末帰宅は続けた。新築をした家は小さな家だが、俊文は今までにないようなおとなしさで、声を発することもなかった。兄は大学を卒業して就職し単身赴任をしていたが、３ ヶ月後に初めて帰宅した。兄が「ただいま」と戸を開けると、俊文は驚いたように目を見開き、次の瞬間大きな歓声をあげ、狂喜したように兄にむしゃぶりついた。このとき気づいたのだが、俊文はがらんどうになった古い家を見て、兄も父と同じように死んでしまったと思ったのではないだろうか。嬉しそうに手を引いてしばらく放さなかった。よほど嬉しかったのだろう。この時以来、奇声を発しつづける俊文に戻ってしまった。



ノートンの《映画、大好き！》

「ウォームボディーズ」（２０１３年）

ご無沙汰しています。前々号、前号と執筆できずでした。また、気合を入れて映画のご紹介をしていきますので、よろしくお願いします。ノートンです。

年が明けました。今年は午年です。年末年始の休みが長く、長期休暇になった人も多いのではないでしょうか。私もソコソコお休みを頂きました。そして、いつものごとく沢山ビールを飲みましたね。幸せなひと時を過ごせ、今年は良い一年になりそうな予感です。

さて、馬が印象に残る映画を考えてみました。最近でいうと、「戦火の馬」でしょうか。スピルバーグ監督の第一次世界大戦を背景にした映画でした。戦場の悲惨な中を颯爽と駆け抜けるきれいな馬が印象的でした。馬といえば競馬。競馬は映画の中でも取り上げられています。私は「ラッキーナンバー7」「のるかそるか」の２作品が印象的です。「のるかそるか」は競馬狂のタクシードライバーの１日をコメディータッチで描いた映画です。主演がリチャード・ドレイファス。とにかくおもしろい映画です。「ラッキーナンバー7」は最初に競馬シーンがあります。悲劇へとつながるシーンですが、そこから話がテンポ良く、サスペンスタッチで進んでいく映画です。どちらもおススメなので、まだ観てない人はぜひご覧ください。

さてさて、今回紹介する映画は馬は全く関係ないです。昨年観た映画の中で最もおもしろかった映画です。物語の設定がおもしろい。ゾンビと人間の恋の物語です。ゾンビは昆虫で言うとゴキブリのように人間から嫌われているキャラクターだと思うのですが、そのゾンビ(男)と人間の女の子が恋に落ちるなんてあり得るのだろうか？実際に映画を観てみると、きちんと成立していました。「ウォームボディーズ」という映画です。

では、簡単にストーリーを・・・

舞台は近未来。そこでは謎のウィルスの影響でゾンビになった人々と人間が互いに敵対しながら生活していた。人間はゾンビから身を守るためにシェルターを作り、武装してゾンビを警戒していた。シェルターの外は廃墟と化し、そこには無数のゾンビがいた。そのゾンビの１人の“R”は、無感情であるゾンビの自分をいつの間にか客観的に見れるようになっていた。自分の名前を思い出せず、思ったことを表現できず、ノロノロと歩く自分に嫌気がさしていたのだ。ただ、ゾンビなので人間を見ると襲って食べたくなるのであった。そんなある日、物資調達のために偵察にきていた人間の一団を発見したＲは、仲間とその人間達を襲撃する。ただ、その中にいたジュリーという女の子に一目惚れをしてしまうのであった。ジュリーのことは襲う気になれないＲ。他のゾンビからジュリーを守りながら、彼の身体に変化が起こり始めて・・・

ゾンビは出てきますが、怖い映画ではありません。こんなあり得ないと思われるような設定を成立させてしまったこの映画はスゴイ！観ていてなんだか不思議な感覚でした。おススメの映画です。ぜひ、ご鑑賞下さい。

疑問符だらけの現場用語集

疑問符だらけの現場用語集（53）　支援現場の実情

このコラムは年明けに掲載される予定ですので、今年一年を見通して 1 つのテーマを提案したいと思います。それは「自閉症の人たちへの支援現場は良くなってきているか？」ということです。

ここ数年、自閉症を取り巻く社会状況は、確かにいい方向に向かっていると思います。発達障害者支援法の施行や特別支援教育が制度化されたのが 2005 年～2007 年の時期です。それらを契機に、発達障害や自閉症に関する書籍やメディアで取り上げられる頻度は格段に増えました。2008 年から始まる世界自閉症啓発デー（4 月 2 日）のイベントは、我が国でも年々盛り上がりを見せています。

こうした社会状況にもかかわらず、筆者の周りを見渡せば、自閉症支援にかかわる学校や施設は旧態依然のやり方と組織体制のまま、漫然と日々の活動をこなしているように見えます。筆者の身近で起きている問題とすると、以下のような事柄があります。

①成人入所施設の新規利用枠はほとんどない。特に行動障害の激しい自閉症の人が施設に滞留化し、ケアホームなどを活用した地域移行は一向に進まない。地域生活が困難になったとしても施設入所の可能性はほぼなく、在宅のままショートステイを長期（あるいは頻回に）利用したり精神病院に入院したりする事例が散見する。

②古くからある施設の生活環境は劣悪なまま、一向に改善されない。外出や作業活動の機会もなく、昼間から施設内を徘徊したり寝て過ごしたりしている利用者も多い。慢性的なスタッフ不足で、スタッフの育成研修も十分でなく、ときに虐待の事件や重大な事故が発生する。

③不登校や学校嫌いの自閉症の児童生徒が多数いるが、不登校の予防や不登校になった場合の組織的な対応は現場任せで終わっている。先生や学校によっては家族や外部機関との連携に消極的で、不登校状態を放置してやり過ごそうとする。

④乳幼児期の診断から早期療育のルートが確立していないため、自閉症の子どもをもつ保護者の不安や混乱が解消されない。診断待ち、周囲からの誤ったアドバイス、近くに専門療育機関がないなどの理由で、結果的に子どもの不適応行動が助長・強化され、家族が苦労する。

⑤自閉症に特化した就労支援機関が身近になく、潜在的には一般就労の力があっても就労の機会が得られなかったり、職場でトラブルが顕在化し失職してしまったりする。

世の中には、自閉症支援に関するさまざまな支援ツールや研究成果が紹介されています。積極的に現場に取り入れている支援者・支援機関もたくさんあることでしょう。支援を受けている自閉症の人たちと家族の生活が実際良くなったというレポートを、切に願います。

＜自閉症eサービス代表　中山清司＞

FM やまびこ　番外編　その２

変わった名前の会･･･

「ローファンクションの会」の紹介

木村　重之

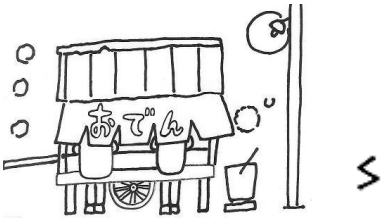
「ハイファンクション」は聞いたことがあるけど…
「ローファンクション」？？ロー？？

なんだか、不思議な名前の会…。
「ローファンクションの会」が始まったきっかけは６年ほど前にさかのぼります。当時、「横浜やまびこ会（横浜市自閉症児･者親の会）」の方たちが定例の勉強会を企画されていたのですが、勉強会の後の質問や相談が毎回多く時間が足らなくなった為、いっそのこと相談コーナーだけの会を別に作ろうという事から始まったそうです。

もともとは、いろいろなタイプの自閉症のお子さんを持つ親御さんが相談されていました。そんな中でいわゆるカナータイプの方の相談とアスペルガー・高機能タイプの方の相談では、相談の内容がずいぶん異なっていた為に、カナータイプの方の相談会が独立して行われるようになったのです。

会の名前も「ハイファンクション（高機能）の会」に対して「ローファンクション（！？！）の会」になりました。訳すとあまりよろしくないので他の名前も考えようとしましたが、とりあえず呼びやすいのであまり深くは考えず･･･会の名前はそのままです（最近は略して「ローの会」なんて呼んだりもしていますが･･･）。

会が始まって３年くらい続いた頃、講師の方が遠方に引っ越された為、横浜やまびこの里に打診があり私がそのあとを引き継いではや３年が経ちました。



「ローファンクションの会」は、年に３回（４か月に１回）のペースで新横浜の「ラポール横浜」の会議室や和室で集まっています。この年に３回のペースは多くもなく、少なくもなく、ちょうど良い回数で４か月の間にそれぞれのご家庭（お子さん）でいろいろな変化があります。良いこともそうでないことも、相談や報告といったかたちで話されます。お子さんの年齢や性別もいろいろで小学校入学前のお子さんもいらっしゃれば、小・中・高生はもちろん、成人されて通所されている方や入所先から週末帰宅される方もいらっしゃいます。全部で 30 名近くのメンバーがいて、毎回 10 名くらいの方が参加されます。

途中、お昼になったらランチタイムで「横浜ラポール」のレストランからそれぞれ注文したものを出前してもらいます。会の時間が 10 時から 14 時までと比較的ゆったりなので午後からお迎えなどの用事がある人もいらっしゃいます。そんな時は途中で退席できるようにその方の相談の順番を早めにしています。

相談の内容は、トイレ（排泄）についての相談、家庭での過ごし方や、学校でのことです。その背景に見えてくるものは家庭や学校などでどのように過ごしていいか分からないところからくる不安やストレスです。そんな中で本人なりの過ごし方が周囲からは問題行動ととらえられることが多いような気がします。実際、学校でストレスを抱えて混乱気味に帰宅したお子さんが自宅で自立課題を行うことで落ち着きを取り戻そうとすることもあるようです。また、ADL についても家庭でどのようにすれば適切なやり方を教えることができるのかといった課題も多く、みなさんと話をしながらお子さんたちがどのように理解をしているのか、またどのくらい見通しを持てているのかということを周りが理解することの大切さを再確認しています。

通園仲間、学校仲間、通所先の保護者会とはまた別の、いろんな年齢のお子さんの親御さんが集まってくるこの「ローファンクションの会」はまた一味違った連帯感が生まれています。以前は親御さんの相談に対して私が主にアドバイスや話をしていたのですが、最近では私だけでなく先輩の親御さんや同じような経験をした親御さんからのアドバイスや意見が出てきたりして、話し合いに一層活気が出てきました。以前は困っていることについての相談が殆どだったのですが最近は、アドバイスを受けて上手くいった報告も増えてきて４時間があっという間に過ぎていきます。

現場の職員にとってもいい経験になると思い、勤務の調整が合えば、私と一緒に参加して親御さんと交流をしてもらっています。

そういう意味では、相談会として始まった「ローファンクションの会」は、今では情報交換の会のようになってきました。私にとっても４か月に１度の「ローファンクションの会」は、ランチやお茶をしながらローファンクションならではの相談や報告の聞ける、とっても魅力的な会になっています。

このような「ローファンクションの会」ですが、お子さんの成長に伴ってどう変わっていくのでしょうか…。お子さんの年齢が上がって、話の内容も変わってくるかもしれません、新しいメンバーが増えて、今はアドバイスを受けている親御さんがその時には後輩の親御さんにアドバイスをしているかもしれません。

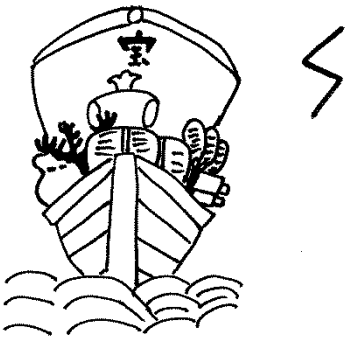
できれば、今のメンバーにはこれからもお互いにとっての良きアドバイザーでいてほしいと思います。

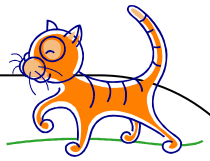
これからも程よいペースで、お互いのお子さんの成長を見守っていきたいですね。

ホームページ☆
ご覧下さい！

— 自閉症者の地域生活を援助する —
社会福祉法人
横浜やまびこの里
http://www.yamabikonosato.jp/index.php

クリック！！





よこはま三歩

はじめまして。今年度４月から、東やまたレジデンスで勤務しております、傳（でん）ひかると申します。どうぞ宜しくお願い致します。以前は川崎市の障碍者施設で勤務しておりました。東やまたレジデンスでの勤務にも慣れ、毎日楽しく勤務しております。

さて、よこはま三歩ということで、横浜について書くべきなのでしょうが、残念ながら私が行ったことのある横浜は中華街くらいで、横浜に住んでいらっしゃる方からすれば、今更紹介するまでもない有名なところでしょう。なので、私が大学のころによくサークルの仲間と遊んだ、野川公園を紹介したいと思います。

野川公園は東京都の三鷹市にあり、調布市、府中市との境にあります。とても広い公園で、ウォーキングには最適です。アスレチックやテニスコートもあり、地域の方が運動に、犬の散歩にとよくいらしていました。また、バーベキューができる広場があり、私たちはそこの管理事務所でバーベキューセットを貸していただき、バーベキューを楽しみました。近くに八百屋さんもあるので、野菜も現地調達できますよ。春には桜が咲き乱れ、お花見にも最適です。よかったらドライブも兼ねて訪れてみてはいかがでしょう。

寒い日々が続きます。桜咲く暖かい春が待ち遠しいですね。

東やまた工房　傳ひかる

自閉症児の親も

一日にしてならず。

ペンネームは
ｍｏｍｏｅ

★momoeさん紹介★
知的障害のある人の地域生活支援をする特定非営利活動法人の理事です。首都圏通勤圏にある某市に夫と夫の母親（要支援 2）、某病院機構事務方に就職した長男と生活介護事業所（通所）5 年目・23 歳で知的障害と自閉症がある（療育手帳で最重度、障害程度区分 6）の次男と暮らしています。

いよいよ次のステップへ　その３　の巻

７月２６日　次男のベーカリーへの異動を８月５日からと決め、異動前の最終話し合いをする。先日私が見学した時の様子から作ったスケジュールを職員と管理者と一緒にチェックし、１週間ごとに替わるシフトを入れ込んでいく。店舗は１０月１日オープンの予定だったので、それまでは午前中にパンの製造、午後は「パン会員」になっている他の事業所への配達グループと、残って清掃や次の日の準備をするグループに分かれている。次男は最初の週と休みを挟んで明けた週ともに、残って掃除組となる（このことが後で次男の欲求不満となっていることがわかる）。

７月２８日　メンバー３人とほぼ毎月恒例のベテランボラさんとの余暇活動。市内の、県が最近指定管理に移行させた入所施設のプールへ。ボラさんのなかにかつて水泳指導員をされていた方（女性：失礼ながら外見からは想像できない）がいて、洗顔でさえ指先に水をつけてちょっちょっと石鹸を落とすしかしない次男を面つけさせてくれたとのこと！！半信半疑だったのだが、後日同じ時にプールを利用していた先輩母にも言われて、「ほんとにしたんだ～」とびっくりする。しかし、予想通り、そのあと４・５回そのプールに行っても、週末の訓練会でも絶対に面つけはしない！と頑張っている。その時その人とだけの、幻の、初めてそして最後の「できたこと」。

７月３１日　長男が就職し長い休みが取れない職種のため、例年行っていた２泊３日の旅行に行けないので、近場の道の駅巡りをする。特産のフルーツがメインのところ、野菜がメインのところ、魚介類がメインのところなどいろいろ寄る。次男はキャラクターグッズをいろいろ触っていたので、話題のゆるキャラのキーホルダーや、県の形をかたどったマスコットがついたドロップの缶などを買う。お昼は大きな器に盛られた海鮮丼と地元野菜のてんぷらを食べる。男三人はまあよく食べる…次男は休日お出かけマストのソフトクリームも堪能する。気に入ったところでちょこちょこ停車し、写真を撮ったり散歩をしたりしたが、ツアーバスと違い車内で気を遣うこともなかったので次男も「降りない」とか「いかない」という意思表示もなく全行程を楽しんでいたと思う。

８月２日　３年４ヶ月通った日中活動の場最終日。いつもよりちょっとおしゃれしていき、午後の異動通知伝達式に臨む。私は参加しないので、理事長に次男からの感謝状を託しておく。帰りには異動通知を持った次男と感謝状を持った職員たちと、メンバー全員で撮った写真を持たせてくれる。「いつ戻ってきてもいいよ（笑）」と言われているので気楽に次のステップにいける。

８月５日　いよいよベーカリーに出勤。しばらく送迎は私がやる（前号で書いたとおり、覚えていて勝手に行ったりはしているのだが、私が心配しているだけ）。この日は造形遊びの余暇活動があり、当日のスケジュールで予告の上、ベーカリーからの帰りに途中下車した。活動を終えて帰るとき、次男は出口で立ち止まり、車は？とばかりにハンドルを回すしぐさをする。しまったああ、今までずっと車で作業所まで迎えに行って帰ったのだが、今日から電車で帰るという予告を忘れていたあああ！たまたまうちと同じ車があったので、次男はそのドアを開けようとする、という抗議をしたが、私が予告をしなかったことを謝ってなんとか歩きだしてもらう。唸りながらの次男と電車に乗り、帰宅。電車で送迎してるんだから、車はない、ということはわかるだろう、ということはな～いというのはわかっているのに、いまだにこういうポカをする私です…

８月１６～１７日　恒例のアルバイトとのペア２組の一泊余暇旅行。今回は浜名湖周辺。昨年は山中湖でのバナナボート体験で、今年はパラセーリング（座位）。やらないかもしれないなあ、と思いつつも「やらなくていいです」とは言わないで、本人たちに任せて送り出す。案の定かなり逡巡したそうだが、がんばって超低空飛行で５分くらいチャレンジしたとのこと。アルバイトが「お金は帰ってきませんがいいですか？」と聞くが、家族で行ったら絶対そんなことをしようとは思わないことにチャレンジしてもらったので却ってありがたいと思っている。

８月２０日　前日一人で行かせたら、ちゃんと往復できたので、この日も GPS の見守りだけにする。すると、朝、降りる駅の２つ前の特急の始発駅でおり、始発の上り特急に乗り換え（！！）どんどん都心に向かっていってしまう。すぐに私も上り電車に乗って追いかけるが２本あとなので、どうあがいても追いつかない。高等部のときは終点で折り返してこちらに帰ってきたので、折り返してくるだろうと思っていたのに、今回はなんと終点より先に行く別私鉄に乗り換えて行ってしまう。その私鉄のコールセンターに電話をするとその電車は終点で折り返す、とのことだったが、またそれより先に乗り換えていってしまう可能性もあると思い、終点の駅務室に電話して、次男の服装などを伝え、見つけて預かってもらうように頼む。見つけて預かっている、と折り返しの電話があったのでほっとしながらも駅員を困らせるようなことをしていないか心配しながら（電車のなかでも走りたい気持ち）向かう。つくと、駅務室の椅子でうつむいて座っている次男が上目遣いで私を見る。やれやれやれやれ・・・・（駅員さんは次男の分の料金は「間違えて乗られたのでいらないです」、と言ってくれる）。この日はもう私も疲れてしまったので、ベーカリーは休むことにして電話をし、途中の大きな駅で降りて、JR が何路線も通る陸橋の近くにある東屋で、次男は朝持たせた弁当を、私は近くのデパートで買った総菜を食べて、家に帰る。さて、この行動をどう考えるか、ベーカリーの職員と私と試行錯誤が始まるのであった…

本棚から

『自閉症の人の自立への力を育てる ～幼児期から成人期へ～』

篁　一誠 著　NPO 法人東京都自閉症協会編　ぶどう社　￥2,000

2009 年 7 月号のマンやまに、同著者による『自閉症の人の人間力を育てる』をご紹介しました。そしてこの本は、同じく東京における2010年度の連続講座全 7 回を一冊にまとめた内容で、2013 年 4 月に発行されました。

「自閉症の人への関わりは、‘問題行動’やこだわり行動をなくすことが目的ではなく、彼らの持っているさまざまな能力を引き出し、家庭生活や社会生活の中で使えるように導いていくこと」という原点にたち、自閉症の特性の見直しや関わる際の心得を述べ、幼児期・学齢期・思春期・青年期・成人期のそれぞれのライフステージに沿って、具体的な事象や事例を話題にしながら、どんな特徴があるのか、そしてその時期にはどのような関わりや支援をしたらよいのか、が具体的に紹介されています。

行動には必ず原因があり理由がある，自閉症の人は人と関わりたくないわけではない、（支援者は）本当に理解するための関わりをすることが大事，家事活動からのさまざまな学び，人から教わる気持ちを育てるそのことが、将来仕事ができる人になることに繋がる，さらには、自閉症の人の意欲の問題を考え、自立と自律について語られます。

「ヒューマニズムだけでサイエンスがない」という福祉現場への指摘は辛辣です。

・・

ちょっと、つぶやきます。

篁氏には、横浜やまびこの里初の通所施設「東やまた工房」開所（1990 年）の時代から職員研修会等で何度となくご教授を受け、1997 年には法人に入職され、利用者のご家族や私たち職員に多くの学びをもたらしてくださいました。2002 年に、法人内で初めての相談部門として「よこはま・自閉症支援室」（現　横浜市発達障害者支援センターの前身）を開室した際も、多大なるご尽力を頂きました。

利用者の行動観察の仕方、記録のとりかた、関わる支援者の姿勢、ご家族へのアプローチ等々、多くの学ぶ機会に恵まれながらも、それを私たちは仕事に生かしてこられているか・・!? 次世代の職員に繋げられているか・・!?　自問自答し、悩ましくなります。法人の理念でもある「自閉症の人の地域生活を支援する」ためには、職員一人ひとりが心技ともに彼（女）らの良き理解者・通訳者である事が求められます。今一度自分たちの支援を見直し、点検するためにも、この本を手にとり読み返し、真摯に利用者に向き合う必要があるのではないでしょうか。

・・

現在も、NPO法人PDDサポートセンターグリーンフォレストの理事長の傍ら、自閉症の人たちに寄り添い＜定点観測＞をする人の役割を重視し、この本の末尾にも綴られている「人生という長いマラソンレースの伴走者であり続けたい」と語る氏の優しい言葉には、そこに関わる教育者・療育者・支援者への‘プロとしての姿勢のあり方を問う厳しい示唆’があることを、読者の皆様は感じることと思います。　＜西尾　紀子＞

追伸：前作でも好評の本文中イラストに、心が和みます(*^_^*)V

△▼横浜やまびこの里後援会▼△

横浜市内で自閉症という障害を持つ人たちが地域で生活をするためのサービスを、一つずつ作り出していく活動をしている『社会福祉法人横浜やまびこの里』の活動のバックアップを目的としています。

入会された方には「マンスリーやまた」「後援会報」をお届けします（郵送）

会員種別	個人会員	法人会員
会費	1口　3，000円／年	1口　10，000円／年
入会時期 （定時入会）	7月または1月	
会費納入方法	(ア)7月入会者 7月～12月入会者は当該年度の会費を納入し、次回からの会費は翌年の7月に納入し、以後毎年7月となります。 (イ)1月入会者 1月～6月入会者は当該年度の会費を納入し、次回からの会費は翌年の1月に納入し、以後毎年1月となります。	
振込口座 （郵便振替）	横浜やまびこの里後援会　〈口座番号〉00240－3－76163	

★後援会のお申し込み・お問い合わせ★

横浜やまびこの里　後援会事務局　　TEL045(591)2728

～編集後記～

新年明けましておめでとうございます。皆さんにとって昨年はどのような年だったでしょうか。　忘年会は年を忘れると書きますが、せっかく積み重ねた一年ですから、忘年ではなく、昨年を踏み台にして、年初めにも「望年会」をやりたいものです。と言いつつ結局、大好きなお酒を飲むための口実に過ぎないのかも・・・。

（小林信篤）

表紙写真　ペンネーム：国鉄福私鉄道（こくてつふくしてつどう）
編　　集　社会福祉法人横浜やまびこの里　（編集責任者　小林信篤）
横浜市都筑区東山田町270番地
TEL.045-591-2728/FAX.045-591-2768
法人ホームページ http://www.yamabikonosato.jp/
印　　刷　ワークステーション　横浜市神奈川区西神奈川1-14-6-1F　TEL.045-316-5710
購読料１部　１５円（税込み）